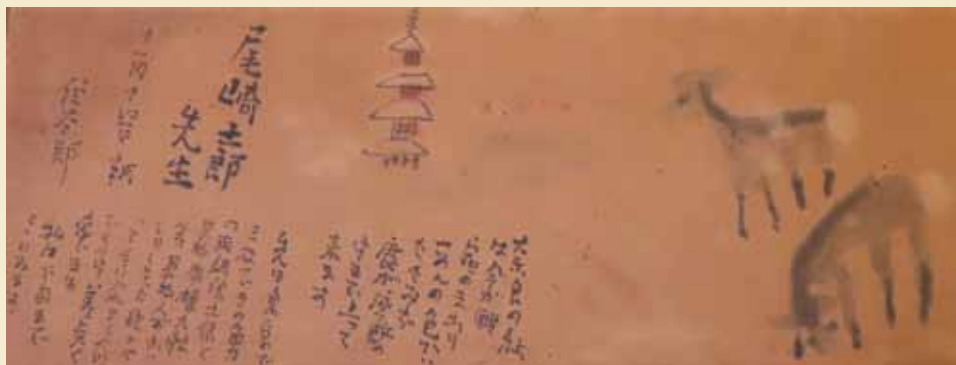


とっておきの一枚！



展示室の資料を入れ替えました！

尾崎士郎記念館では、展示室の一部資料入れ替えを行い、昨年7月3日から公開しています。上に掲載した書簡は、洋画家・鈴木信太郎が士郎へあてた近況報告の画(部分)です。普段は窓越しからの見学となりますが、ギャラリートーク(今年度の予定参照)では室内でご覧いただけます。



鈴木信太郎「相州真鶴」(水彩47cm×35cm)
車椅子を必要とした身でありながら、信太郎は全国を回り、その風景を描き続けた。
尾崎士郎記念館所蔵

2022年度の予定

1. 散策会

山王草堂記念館など文化施設と連携して、馬込文士ゆかりの場所を散策します。

○5月15日(日)「尾崎士郎と宇野千代～馬込転入から100年～」

○2023年3月12日(日)「徳富蘇峰と勝海舟の200年(仮)」

2. 2館ギャラリートークのご案内

○以下の日程で山王草堂記念館と合同でギャラリートークを行います。毎月第1土曜日 各日11:00～、13:00～ 2館合わせて1時間ほど。電話・FAX(共に03-3772-0680 龍子記念館内)による事前申込制(各回定員10名)

※散策会などの詳細は大田区報、情報誌『Art Menu』、公式ホームページ等に掲載します。

大田区立尾崎士郎記念館版 記念館ノート

第6号

発行：2022年3月31日

編集：大田区立龍子記念館

館のトピックス

◆尾崎士郎と鈴木信太郎の交友

真鶴の風景画や老舗洋菓子店の包装紙のデザインで知られる洋画家・鈴木信太郎(一八九五～一九八九)は、尾崎士郎の作品の挿絵を多く担当しました。挿絵を担当しただけではなく、信太郎は士郎と私的な交友を深め、士郎が世を去るまでその交友は続きました。一九四六年、戦争責任から公職追放令を受け、人付き合いを避けていた士郎を励まし続けた人物こそ信太郎です。とっておきの一枚で紹介した近況報告の画は、信太郎が奈良へ旅行した様子が描かれ、「童話的な線のうつくしさがびつたりと調和して豊かな人間味がうまれてくる(尾崎士郎「土俵の夢」)と士郎が言う信太郎らしい一枚です。その末尾に、信太郎は角力好きの士郎へ、画を贈る約束を添えています。そして、一九四七年の正月、双葉山の引退相撲を描いた画が士郎の元へ届き、士郎を喜ばせました。その翌年に追放令を解かれた士郎は人気作家として復活を遂げ、信太郎は士郎にとって欠かせない挿絵画家となりました。

館の基本情報

《所在地》

大田区立尾崎士郎記念館

〒143-0023 東京都大田区山王1-36-26

※建物内には、お入りいただけません

TEL 03-3772-0680(龍子記念館内)

URL <https://www.ota-bunka.or.jp/ozaki/>

《アクセス》

①JR大森駅より東急バス「上池上循環内回り」「新代田駅前」行

②都営浅草線馬込駅より東急バス「上池上循環外回り」「大森操車場」行

いずれも「山王二丁目」下車、徒歩約5分

③JR大森駅西口より徒歩約15分

《入館案内》

●開館時間 9:00～16:30(入館は16:00まで)

●入館料無料 ●休館日 年末年始、臨時休館

尾崎士郎と萩原朔太郎の馬込時代

大田区立尾崎士郎記念館 学芸員 黒崎 力弥

はじめに

一九二三（大正十二）年九月、小説家・尾崎士郎（一八九九～一九六四）が馬込に転入すると、小説家たちの交流が頻繁に行われるようになった。交友関係の広い士郎が、仲間に転入を勧めたことがその契機となっていた。一九二六（大正十五）年に詩人・萩原朔太郎（一八八六～一九四二）が転入したことで、馬込に集った人々の交流は更なる広がりを見せた。中でも、士郎と朔太郎の交流は特筆すべきものであった。二人は一回り以上の年齢差のほか、文学の表現手法や性格上の氣質が異なりながら、毎日のように顔を合わせ、「この詩人の感情と自分の感情とのあいだに、深い共通点のあることを感ずる」（『尾崎士郎』小説四十六年、『東京新聞』一九六二年十月二十五日夕刊）仲となった。士郎と朔太郎の関係は約四年と短い間であったが、後に士郎の『荏原郡馬込村』や朔太郎の『移住日記』等の題材となった。本稿では共に創作活動の転機となった士郎と朔太郎の馬込時代について考察する。

一、朔太郎の馬込転入まで

一九一三（大正二）年五月、前橋に暮らしていた朔太郎は「みちゆき」他五編の詩で日本近代詩を代表する詩人の一人・北原白秋（一八八五～一九四二）に認められ、詩人として本格的な活動を始めた。そして、ほぼ同時期に白秋門下となった金沢の詩人（後小説家）の室生犀星（一八八九～一九六二）を一九一四（大正三）年二月に朔太郎は前橋へ誘い、約一か月、毎日のように顔を合わせたことで生涯の友となった。一九一六（大正五）年六月、二人は詩誌『感情』を創刊して発表の場を作り出し、翌年二月には、朔太郎が第一詩集にして代表作となる『月に吠える』（感情詩社ほか）を発表し、詩壇において注目された。詩人としての地位を順調に築き上げながら、朔太郎が本格的に東京を拠点としたのは、一九二五（大正十四）年からであった。家族とともに上京したものの安住せず、数か月ごとに大井町、田端、鎌倉と転居を繰り返し、ようやく一九二六（大正十五）年十一月、馬込村平張一三二〇（現・南馬込三三二〇）に転入し、四年に渡って生活を送ることになる。

二、士郎と朔太郎の交流

大正末から昭和初期にかけて、文学界は大きな動きを見せていた。一九二六（大正十五）年十月、詩人団体『詩話会』が解散し、朔太郎は主としていた作品発表の場を失った。また、政治的情熱を主としたプロレタリア小説家と芸術的情熱を主とした昭和初期インテリ作家との対立が発生し、さらに、一九二七（昭和二）年七月、代表的なインテリ作家とされていた小説家・芥川龍之介（一八九二～一九二七）が様々な理由から自ら命を絶った。そのため、「こういう環境の中で馬込村の空気が恐ろしく動揺していた」（尾崎士郎『小説四十六年』、『東京新聞』一九六二年十月二十五日夕刊）。士郎は社会主義運動を主題に小説を発表しながらも、プロレタリア小説家とは交わることが無く、文壇で孤立していた。また、士郎は作品の評価よりも醜聞で知られる小説家であった（『愛人』に走った閨秀作家 藤村千代子と尾崎士郎君（『国民新聞』一九二三年八月十二日）。それでも、一九二七（昭和二）年の初め頃、朔太郎は士郎の家を訪ねた。転入以前に二人の交流はなかったものの、以後、士郎と朔太郎は頻繁に顔を合わす仲となった。かつて犀星と成し得た『感情』と同様、朔太郎は士郎と同人雑誌『独逸（ドイツ）黒』の発行を発案したが、実現しなかった。しかし、夏には二人は伊豆湯ヶ島へ逗留したことで、馬込ゆかりの文士としての交流を深めることとなった。まず、小説家・川端康成（一八九九～一九七二）の誘いで士郎が湯ヶ島の湯本館に逗留し、後に朔太郎は士郎を訪ねた。湯ヶ島で、朔太郎は詩人・三好達治（一九〇〇～一九六四）と出会い、達治は朔太郎に師事することとなった。そして、湯ヶ島から帰京後、達治は朔太郎を頼って、大森新井宿一二六に転入し、馬込ゆかりの文士となった。

一九二八（昭和三）年十一月には、朔太郎の誘いから、犀星が大森谷中一〇七七へ転居し、馬込の交流はますます賑やかになった。かつては、小説家は小説家同志、詩人は詩人同志と小グループの交流であったが、士郎と朔太郎の交流から、小説家と詩人の垣根を超えた交流が実現し、後に馬込が「文士村」と称される素地を作り上げられた。

おわりに

一九二七（昭和二）年六月十七日、朔太郎は、士郎と馬込を素材とした『移住日記』を『都新聞』に発表した。坂が多い馬込の景観を「ロマンチック」とし、「此処へ来てから、始めて小説家の尾崎士郎君と知己になった。（略）不思議とどこか、二人の性

情（氣質）に似たところがあるからだろう。この新しい友人を得たことは、私にとって意外な喜びである」と朔太郎の作品にしては、自然と交友の情景が力みのない明るさで書かれ、九月には、その発展形とも言える散文詩「坂」が発表された。その後、一九二八（昭和三）年九月、士郎は私小説的作風で馬込を本格的に素材とした作品『荏原郡馬込村』を発表し、準主役として朔太郎を描いている。残念ながら、翌年の七月に朔太郎が、十月に士郎が馬込から去り、二人の交流は、四年程で途絶えてしまった。しかし、後に二人は馬込時代を転換期として肯定的に語っており、生涯にわたる創作の基盤としたのであった。

※後に小説家・神山潤（一九〇〇～一九八〇）が『馬込文士村』（東都出版一九七〇）を発表したことで、交流が賑やかだった時代の馬込界隈は「馬込文士村」と呼ばれるようになった。

主要参考文献

- 尾崎士郎『小説四十六年』講談社一九六二年
- 『萩原朔太郎全集 第八巻』筑摩書房 一九七六年
- 大田区立郷土博物館編『馬込文士村 あの日、馬込は笑いにみちていた』二〇一四年
- 大田区立郷土博物館編『まちがやがって来た―大正・昭和のまちづくり―』二〇一五年



朔太郎の旧居表示板（※旧居跡ではありません）。
ここから坂道一つ渡った所に士郎の旧居表示板がある。
2022年2月撮影